

河上肇と古典派経済学

——『資本主義経済学の史的発展』を中心として——

杉原四郎

はしがき

相沢秀一教授は本誌第一八巻第一号（昭和四年四月）に「河上・経済学の今日的意義」という一文を寄せ、教授の恩師河上肇の経済学について語っておられるが、本稿はその驥尾に付き、教授もそこでとりあげている河上の『資本主義経済学の史的発展』を中心として、河上の経済学史研究の「今日的意義」について考えて見たいと思う。一方ではそれによって本年一月に歿後二五年をむかえる河上肇への追慕の念を、他方では今年三月で本学を停年退職される相沢教授への敬愛の思いをあらわしたいというのが、私の微意である。

一

一九二三（大正一二）年八月に刊行された河上肇の『資本主義経済学の史的発展』は、菊判で本文六二五ページの大きさで、経済学史に関する河上の多年の研究と講義の成果を集大成した記念碑的作品であるが、第二版

（一九二五年）ではじめて六ページのはしがきがつくまでは、はしがきもなければあとがきもないという、河上の著書としては異例の体裁をとっていた。後にのべるように、本書がこうした不体裁なかたちで公刊されたのは決して偶然ではなく、それなりの理由があつたことなのであるが、著者が本書で何をどのように問題にしようとしたかを端的に表明した序も跋もないことは、読者にとっては甚だ不便である。だがわれわれはそれにかわるべき資料を、本書の刊行直後に出た河上の個人雑誌『社会問題研究』（第五〇冊、一九二三年一月）の末尾に掲載されている本書の広告のなかに見いだすことができるであろう。そこにはつぎのような一文がかかげられているのである。

「著者は資本主義経済学と社会主義経済学との歴史を書く予想を有つて居り、さうして本書は其の実現の一に属する。取扱つた年代は、マンダケルの詩が公にされた一七〇六年からラスキンの経済論が公にされた一八六二年まで、約百五十年に亘り、その間、資本主義経済学の成立の萌芽から、其の完成を経て、遂に崩壊の氣運に向ふまでの論理的發展を、史的發展「發展の誤植であらう——杉原」によって裏付け、之によって、時代を支配する思想は、社会の物質的条件の發展に伴うて始めて論理的展開を為し得るものと云ふことを、稍々明かならしめた積りである。」（著者）

この文章は短文ながら重要なつぎの三つの事柄をあきらかにのべたものといつてよい。すなわち第一に、本書は著者の包懐する経済学史体系の前半部を占めるべきものであつて、それは後半部の『社会主義経済学の史的發展』によって補完されるはずであるということ、第二に本書の対象はマンデヴィルからラスキンにいたるイギリス経済思想史であつて、この一五〇〇年間は資本主義経済学の成立→完成→崩壊の過程でもあるということ、

そして第三に著者の意図は、この間における資本主義経済学の論理的発展を史的発展によって裏づけることにあり、およそ時代思潮の展開は社会の物質的條件の発展にともなうてはじめて可能であるということをあきらかにするところにあつた、ということこれである。

ところで前稿「河上肇と古典派経済学——『近世経済思想史論』を中心として——」（関大『経済論集』第二二卷第一号、一九六二年）でのべたように、本書の三年まえに河上が公けにした小冊子『近世経済思想史論』（一九二〇年）は、資本主義経済学と社会主義経済学の二つの経済学の史的発展を素描しつつ、スミスからマルクスへとこの経済学史の基本線を簡潔に展開したものであるが、『資本主義経済学の史的発展』——以下『発展』と略称する——はこの河上学史体系の原型たるこの『近世経済思想史論』——以下『史論』と略称する——の構想を基本的には継承しつつ、その前半部たる第一講「アダム・スミス」と第二講「マルサス及びリカード」を拡大し独立させたものと見ることができ得るであろう。では『発展』は『史論』をどのように継承しどのように拡大しているのであろうか。この点をあきらかにするために、『史論』の第一・第二編と『発展』とのそれぞれの篇別構成を、比較対照してかかげることにしよう。「」の箇所は両書を比較する便宜上私が叙述の内容にしたがって補足したところである。

『史論』

第一講 アダム・スミス

第一段 近世経済学の成立

第二段 資本主義的経済組織の是認

河上肇と古典派経済学（杉原）

『発展』

第一章 アダム・スミスの先駆者

第二章 アダム・スミス

第一節 アダム・スミスの生涯及び論著

第二節 アダム・スミスの根本思想

第一 資本主義的経済組織の成立に関する考察
第二 資本主義的経済組織の作用に関する考察

(一) 生産論

(二) 分配論

第三段 自然的自由主義

第一 緒言——近世デモクラシーの発達

第二 アダム・スミスの自由放任論

第二講 マルサス及びリカアド

第一段 緒言

第一 スミスの後継者としてのマルサス及びリ

カアド

第二 マルサスと分配問題

第三 第十八世紀末における思想界の大勢

第四 ゴドキンの理想論

第二段 マルサスの人口論

第一 マルサスの所謂人口の原理

第二 マルサスの貧乏必要論

(一) 自由放任政策

(二) 生存権否認

第一 緒言(資本主義的経済に対するアダム・スミスの態度)

第二 資本主義的組織の下における個人の利己的活動の社会的効果に対するアダム・スミスの楽観主義

(一) 生産問題に関するスミスの楽観主義

(二) 分配問題に関するスミスの楽観主義

(三) アダム・スミスの自由主義——彼れの謂ゆる自然的自由の制度

第三章 マルサス及びリカアド

緒言 スミスの後継者としてのマルサス及びリ

カアド マルサス及びリカアドの分配論の方面における貢献

第一節 マルサスの人口論

第一 マルサスの生涯及び論著

第二 マルサスの『人口の原理』

(一) 緒言

(二) マルサスの『人口原理論』が公けにされた当時の思想界の大勢

(三) マルサスの謂ゆる人口の原理

第三 マルサスの資本主義的経済組織の是認

(三) 私有財産制是認

第三 思想史上におけるマルサスの地位

第三段 リカアドーの分配論

(一) 緒言

(二) 地代論

(三) 労賃・利潤論

第四段 (「リカアドーの労働価値論、ただし第三

講カール・マルクス、第三段 労働価値説
の一節。二三二—二四一ページ)

両著の内容のこうした対比を一見してすぐわかることは、五章構成の『発展』が、その中の第二章と第三章とで『史論』の第一講および第二講とに照応しながらも、その対象領域を史論とくらべて時代的に大きく拡大し、スミス以前に第一章を、そしてリカードウ以後に第四、第五の二章をあてているということである。『史論』の第一・二講と『発展』の第二・三章とではその骨格においてほとんどかわっていないのだから、両者のちがいは『発展』におけるこの前後へのはみ出し部分にあるといえよう。そしてこの部分にはロック、マンデヴィル、ヒ

(一) 自由放任政策の主張

(二) 生存権の否認

(三) 私有財産制の是認

第四 思想史上におけるマルサスの地位

第二節 リカアドーの『経済原理』

第一 リカアドーの生涯及び論著

第二 リカアドーの分配論

(一) 緒言

(二) 地代論

(三) 労賃論

(四) 利潤論

第三 リカアドーの労働価値説

第四章 ベンタム及びデュエイムス・ミル

第五章 デュオン・ステュアト・ミル 附り、カラ

イル及びラスキン

ユーム、ベンタム、ミル父子、カーライル、ラスキンといった『史論』には出てこなかった人々が多数登場するし、しかもこの部分の叙述は狭い意味の経済学からぬけ出して倫理学や文学の領域にまで進出している⁽³⁾ので、『発展』の世界は『史論』よりずっと多彩になり立体化しているという印象を与えることになる。だがこうした印象に幻惑されて、『発展』においても『史論』のスミスからマルクスへとという基本視角が堅持されていることを見失うなら、それは『発展』の性格を誤解することになるであろう。たしかに『発展』には『史論』の第三講カール・マルクスがなくなつて、そのかわりに第一章と第四・五章がつけ加わり、この部分の方が量的にはスミス、マルサス、リカードウをとりあつた第二、三章の合計をかなり凌駕するほどであるから、河上学史体系のなかでいわば両横綱の地位を占めるスミスとマルクスが『発展』の場合は『史論』よりずっと後景にしりぞいたかのように見えるけれども、実際は『発展』の冒頭の文章が「私はアダム・スミスを以て個人主義経済学の創設者となさんとする者である」ことが端的にしめすように、スミスの主導的地位は『発展』においても決してゆらいではない。さらに第一章の表題が「アダム・スミスの先駆者」となづけられているように、そこに登場する人々はいわばスミスの露払いとして出てくるのであり、第二章でスミスが本格的にとりあげられるところ（第二節「スミスの根本思想」）では、まずスミスとマルクスとの研究態度の比較から議論がはじまっているのであり、第五章であれほど詳細にJ・S・ミルのことが語られているのは、「経済思想史を辿つて、個人主義経済学の創設者アダム・スミスより社会主義経済学の創設者カール・マルクスに達する途中において、個人主義経済学より社会主義経済学の過渡の時代を代表するジョン・ステュアート・ミルに出合ふ」からであつた。スミス→マルクスが『発展』のバックボーンでもあることは明白であろう。

(1) 『發展』は一九二三年八月の初版以来翌一九二五年一月の第二〇版にいたるまで誤訳・誤植その他細部の訂正以外は内容に変更がなかったが、第二版（一九二四年一月）で冒頭にはしがき加わるとともに附録第二（六二六―六七二ページ）が追加された。これは『社会問題研究』第五七・五八冊（一九二四年一〇、一二月）所収の「資本主義の社会とは何ぞや（個人主義的社会組織の極度なる發展段階としての資本主義的社会）」を収録したものである。なお『發展』の最終版は私の知るかぎり第二六版（一九二七年五月）であるが、第二版以降には内容上の変更はない。

(2) 「社会主義の経済学」は、マルクスによって十分なる科学的基礎を具ふることに為つたのであるが、この派の思想のためには、私は他日、本書の姉妹篇として別に『社会主義経済学の史的発展』と題する一書を著し、そのうちにおいて、この派の思想の由来、その發展、並びにその科学的完成に至る経路を記述するつもりである」（『發展』五五九―五六〇ページ）。もしこの計画が実現していたとすれば、河上が『社会問題研究』に連載していた「ロバート・オーウェン（一）」（第一四―二七冊、一九二二―二三年）などもその一章として利用されたことであろうが、この計画は結局実現しなかった。河上のこのオーウェン論については土方直史「日本におけるロバート・オーウェン研究史」『経済学論纂』第一〇巻第三・四合併号、一九六九年七月）を参照。

(3) 『發展』の登場人物が多くなっただけでなく、その一人一人の「生涯と論著」の説明にスペースが惜しみなくつかわれていくつともなっているが、樺田民蔵は次節でとりあげる『發展』批判の論文のなかで、これは思想の個人的相違に重きを置く河上の方法論のあらわれであり、河上がこうした方法をとるのは、「博士には、経済学の發展については、経済事實は、むしろ間接の背景であり、直接の問題としては、その時代の道徳論、若しくは哲学論というものが著しく重大な問題となつてくる。…しかも博士の考えではその道徳論や人生観や一般の常識として市中の随所にこらうて居るものでなく、何等かの興義として天才の体得するものであらうから、学者、思想家が個中の初案として子弟の間に、友人の間に、要するに互に共鳴し合うものの中にのみ相伝うるものであらうから、それ等の互いに共鳴し合う仲間の関係というようなのは大切になつて来、又個々の思想家の資質徳性乃至個人的体験というようなことがやはり問題になるであらう」という理由にもとづくものとしてい

二

『史論』と『発展』との基本的共通点をまずこのように確認したうえで、つぎに両者のちがいを考えて見よう。このことはとりもなおさず『発展』でどうして第一章および第四・第五章が書き加えられたのか、つまりどうして「マンデヴィルからラスキンまで」が考察の対象とならなければならなかったのかということを検討することになるのだが、それには前節で紹介した『社会問題研究』所載の著者のことばではふれられていない河上の内的動機に発する事情があるのであった。前稿でものべたように、河上が京都大学の講壇で経済学史を担当し、古典派経済学の本格的研究をはじめようになるのは大正四年以後のことであるが、それよりもずっと以前から河上がいだきつづけてきた思想上の根本問題があつて、それが河上の経済学研究のとりわけ学史研究の中にももちこまれてきていたという事情である。そしてこの『発表』の背後にあるいわば秘められた意図のことを、河上は『発展』第二一版にあらたにつけたはしがきの末尾ではじめて読者に告白した。長きをいとわず全文を引用しよう。

「著者は明治三十五年に大学を卒へたが、それより前、まだ在学中の頃から、彼は、彼れの棲める社会に広く行われつつある利己的活動是認の思想——利己的活動の否認が齎す生存脅威の事実——について、抜くべからざる疑問を抱くに至つた。後、明治三十八年末頃に及び、自ら世に処するについての根本的態度は、聊か自得するところにあるやに覚えたけれども、なほ往年の問題は、常に彼れの脳裏に残存した。彼が経済学の研究に志したのは、勿論この問題を解決せんことを意識的の目的としたのでは無かつたけれども、しかし彼れの研究は、知らず識らずの裡に、おのづから此の問題を中心として組織づけられた。本書は、当年を距る殆ど二十年に近き頃に、始めて公にし得たものであるけれども、その全篇を通じて、利己心是認の思想に対する詮索が、おのづから

其の中心となりつつあるのは、著者の学問的研究が上述の由来を有するがためである。著者は已に馬齢五十に近く、自然、学界の進運に伴うて歩むことには、今後次第に困難を感じるに至るであらうと思ふけれども、なほ生きてゐる限りは、成るべく勉強して、新たな眼を開かんことを欲する。けれども、過去の彼は嘗てありのままに残る。この書は即ち、利己心是認の思想を主たる問題となしゐたりし時代の、著者の眼に映りし近世経済思想史である。それとして猶ほ多少の世用を成すの余地を有ち得るであらうと自惚れつつ、自ら其の欠陥を悟りながらしばらく之をそのままに刊行する⁽¹⁾。

河上が学生時代から利己心の問題に深く心を寄せ、明治三八年末には伊藤証信の「無我苑」とびこんで「大死一番」の体験をする経緯や、その後間もなく宗教運動を棄てて経済学の研究にもどるが、学究としても個人の利己的活動の是非という問題がつねに彼の思索の根底にあつたという事情については、彼の後年の著書『経済学大綱』の序や、ヨリくわしくは『自叙伝』——「自画像」の前半や「大死一番」——が語っている通りである⁽²⁾。

『発展』はまさにこのような彼のメンタル・ヒストリーの産物であり、またそうであればこそ「筆を利己的活動是認の思想に起し、利己的活動否認の思想をもって巻を結」ぶという「独自の構成をもつた」ユニークな経済学史が書かれ得たのであつた。その意味で『発展』は『史論』よりもずっと河上らしい学史であり、『発展』は河上の、すくなくもある時期の河上の代表作といつてよいであらう。

このような『発展』に対して河上が強い自負と愛着をいだいており、またそのことをしばしば公言していることは自然であるが、問題なのは彼がそうした気持を表明すると同時に『発展』の欠陥をはっきりと自認していることである。河上のこうした複雑な心境は、さきにかかげた第二一版へのはしがきの文章にもあらわれているが、

河上が『発展』に対してもやもやした気持を持っており、明確にそれが整理されないままに出版のはこびとなつたということが、序文も後書きもない異例のすがたで本書が世に出ることになった理由でもあった。この点を河上は一九二四年六月一六日づけの榎田民蔵への手紙のなかで率直につきのべている。「資本主義経済学の史的発展」は、私の頭がシッカリせぬうちに……ああいふ構想が出来上つたので、その構想の骨子は畢竟貧乏物語時代に在るのです。それでグズグズしてゐると、あれは出版する気がなくなりそうなので、さうならぬ前にもかくああいふ風に纏つたから、何かの役に立たうと思つて、世に公にしたのです。何時も私の著書に欠かしたくない序文を、あの本にのみ省略したのは、何んともハッキリしかねる気持があつて、私がああ書でどれだけの事を成したへたり、どれだけの事が成されずに残つてゐるか、等々のことが自分でもはっきりし兼ねたからであります⁽³⁾。このような事情のもとに出版されたということにも、『発展』が河上の生涯の前期でも後期でもなくまさに前期から後期への過渡期——一九一九（大正八）年から一九二四（大正一三）年までの——産物⁽⁴⁾であることがよくあらわれているのだが、過渡期の産物の宿命としての二重性格、二重性格なるがゆえに当然生じた種々の論理的破綻、河上が内心ひそかに自覚しおそれていたところのこうした本書の欠陥を白日のもとに暴露したのが、榎田民蔵の有名な論文「社会主義は闇に面するか光に面するか——河上肇博士著『資本主義経済学の史的発展』に関する一感想——」であつた⁽⁵⁾。

前節で紹介したように、『発展』刊行時に『社会問題研究』にのつた著者のことばは、「時代を支配する思想は社会的物質的条件の発展に伴うて始めて論理的展開を為し得るものだ」ということを『発展』であきらかにしたとのべていたが、『発展』のなかでも河上はミルの功利主義観が初期から後期に大きくかわつたことを説いた

ところでこういつている。「ミルの功利主義に関する後年の解釈——も、実は個人主義の内面的発展の一つの現はれである。ただ斯様な論理的発展が単に論理力によつてのみ実現され得ず、何時でも社会の物質的発展を其の必要なる背景として土台とすることは、既に私の繰り返し述べたところである」と。⁽⁶⁾だが上部構造に属する思想の意識形態の展開が究極において土台である経済構造の展開によつて規定されるということの具体的事例にそくした『発展』の説明は、決して詳細なものでも説得的なものでもなかった。いわんや榎田のように、「経済の学史は通常云はるるやうに、経済史実と照応してはじめて理解せらるべきものであるは勿論、常に各時代の階級闘争の事実を前提して説明せらるるが、又それぞれの学説に於ける主要な範疇や法則やの理論的分析から一定の階級闘争の反射としての階級意識の存在を見出すことによつて如何にそれ等の学説がその時代の階級意識の表はれであり又その発展であるかを明かにすべき」⁽⁷⁾だという立場からすれば、『発展』の叙述が唯物史観にもとづくものであるとは到底承認できなかった。マルサスやリカードのところに多少とも具体的な経済思想乃至学説をとりあつかっているところはまだそうした観点が不十分ながらうかかえるとしても、⁽⁸⁾スミスやJ・S・ミルのところのように、彼等の「根本思想」が倫理観を中心に説かれる場合には土台との照応関係への顧慮がほとんどなく、あたかも学者の間の個人的な伝承関係を通じて道德思想が自己展開するような説明ぶりである。とくに榎田にとつて我慢がならないのは後期のJ・S・ミルやカーライル・ラスキンなどいわゆる人道主義の思想に対する河上の態度であつて、特権階級の反動思想以外の何物でもない彼等の人道主義を「社会主義の母でなければすくなくとも父であり得る」としたり、ラスキンとマルクスの経済論を「共に人類としての同じ立場から物を観た」⁽¹⁰⁾と評価するにいたつては、河上自身人道史観に立っているとせざるをえないであらう。ラスキンが力説した

「人間性の美はしき方面」⁽¹¹⁾に面することによって社会主義が生れるという『発展』の結語に対し、榊田論文はつぎのような結語を以てこたえている。「社会主義は闇に生れるが故にのみ光を産むのであって、光に面するが故に光を産むのではない。むしろそのより多く闇に面するに依ってより多く光に面することが出来るであろう」⁽¹²⁾。

河上はこうした榊田の批判をほぼ全面的にうけ入れ、それを第二版へのはしがきのなかで「私は繰返し氏の論文を読んで見たが、結局氏の意見は根本の主張において寔に尤もであるといふ結論に達した」⁽¹³⁾と公表した。そして「マンデヴィルからラスキンまで」の個人主義経済倫理思想史をたどったこの『発展』の著者は本質的には『貧乏物語』の著者とかわっていないことを自認した。⁽¹⁴⁾

たしかに河上は『貧乏物語』のなかでマンデヴィルの『蜜蜂物語』を紹介し、それが「後に至って正統派経済学派の根本思想を産むの種子と為った」こと、そして「一たびマンデヴィルに依って創められた利己心是認の論は、其後ヒューム、ハチソン其他の倫理学者の手を経て、遂にアダム・スミスに伝へられた」ことを指摘している（九の三、九の四）、『発展』第一章の構想がすでにここに胚胎していることがわかる。またラスキンの名は『貧乏物語』の本文のなかには登場せず、序のなかに「ラスキンの有名なる句」として「There is no wealth, but life.（富何物ぞ只生活あるのみ）」がかかげられているだけであるが、同じ大正六年および翌七年の『経済論叢』に「ラスキンの『此最後の者にも』」という論文を書いて、ラスキンの富の定義を「其のままに受け入れんとするものである」と書き、さらに同七年に出た石田憲次訳「此最後の者にも」に寄せた序で「一方には組織改造の論を為すものに社会主義の経済学あり。他方には、人心改造の論を為すものに人道主義の経済学あり。二者相俟って現代社会の二大思潮を成す。独逸に於ける第一九世紀後半の一大思想家カルル・マルクスは、即ち前者を代表するの巨

人にして、英国ヴィクトリア王朝時代の三大文星の一と称せらるる我がジョン・ラスキンは、即ち後者を代表するの第一人者なり」とのべていた。してみればラスキン論を終章のしめくりにもってくる『発展』の構想もまた、この時期に発していたのであって、スミスからマルクスへという視角が河上の後期に一そう明確化されるものであるのに対し、マンデヴィルからラスキンへというもう一つの視角は、むしろ前期の河上からもちこされたものといつてよいであろう。『経済論叢』のラスキン論文は『社会問題管見』（一九一八年）にそのまま採録され、⁽¹⁵⁾改版『社会問題管見』（一九二〇年）で一旦姿を消すが、『発展』のラスキン論で実質的に復活したことになる。もつともそこでは人心改造論のラスキンと組織改造論のマルクスとが対等にならべられているのでは決してなく、ラスキンはどこまでもスミスからマルクスへという基本線のうえにおかれていることにも留意せねばならぬ。一九二二年三月の『社会問題研究』第二一冊に発表された注目すべき論文「心的改造と物的改造」においてすでに河上は、「心的改造は強制的改造の前提であり、又斯かる意味においてのみ心的改造論の提唱に価値あることを承認せんとする者である」という、⁽¹⁶⁾前期の河上の立場を明らかに脱却した思想をのべていたのであった。やはり『発展』は河上にとって過渡期の産物であったのである。⁽¹⁷⁾

(1) 『発展』第二二版、一九二五年、はしがき五一六ページ。

(2) 『経済学大綱』には改造社『経済学全集』版、戦後の改造社版、青木書店版、三笠文庫および著作集版があり、『自叙伝』には世界評論社版（原版と普及版）と岩波書店版と著作集版とがあるが、ここではともに最新の著作集版のページ数をかかげておく、『河上肇著作集』第三巻、筑摩書房、一九六五年、七七八ページ。同第六巻、一九六四年、二五〇一―二五〇二ページ、同第九巻、一九六四年、二一五―二一五〇ページ。

(3) 大内兵衛編『河上肇より橋田民蔵への手紙』、鎌倉文庫、一九四七年、一二二―一二三ページ。『発展』出版直後の一九二三年八月二十九日づけの橋田への手紙では「まとまった序文を書きたいと思いましたが、夏期講演で弱ってしまった上に、序に「研究」を

出さうとしたので、いよいよ根気がつきて、序文も一応やめにしておきました」とのべていた（同書、九七ページ）。

(4) 河上の生涯を前期（人道主義時代）、過渡期、後期（マルクス主義時代）の三期にわけ、各期の代表作を一点ずつあげるとすれば、私は『貧乏物語』、『発展』および『資本論入門』の三点をあげたいと思う。

(5) この論文は『改造』一九二四年七月号に掲載され、後橋田民蔵全集第一卷『唯物史観』（改造社、一九三五年）に収録された。

(6) 『発展』五〇七―五〇八ページ。

(7) 橋田民蔵全集第一卷、一八二ページ。

(8) 橋田は河上がマルサスとリカードウの所説が資本家的階級意識のあらわれだとしていることを評価しつつも、河上のようにその点で両者を全く同一視するのは不十分だとし、リカードウ地代論に関する河上の解釈を批判した上でつぎのように指摘しているのは注目される。「マルサス及びリカードの経済学説は、同じく労働者階級に対する資本側の階級意識の表象であつても、一方は、地主階級の代弁であるに反し、他方は資本家階級の代弁である。これは当時において全労働者階級に対する全資本家階級の攻勢を示すと同時に、資本家階級内部における分裂抗争の情勢に照応するものと思ふことが出来、又両者の学史上における地位はこの点に求むることが出来ようと思ふ」。全集第一卷、二〇〇ページ。

(9) 『発展』五六二ページ。

(10) 同五八〇ページ。

(11) 同五八七ページ。『経済学大綱』では「人間性の他の方面」とかえられている。著作集第三卷、七二〇ページ。

(12) 全集第一卷、二一七ページ。

(13) 『発展』第二十一版の発行に際して、四ページ。

(14) 大正十三年七月一日づけの橋田への手紙（大内編、一二三―一二四ページ）を参照。

(15) 『経済論叢』の論文からの引用と石田憲次訳本序からの引用とをこの『社会問題管見』から孫引きしておく、一〇三―一〇四ページおよび七六ページ。

(16) 『社会問題研究』第二一冊、一〇ページ。山之内靖もこの論文が『発展』の思想的背景をみる場合に重要であることを指摘している。山之内「大正デモクラシーとマルクス主義」、長・住谷共編『近代日本経済思想史講座』Ⅰ、有斐閣、一九六九年、三二―三三ページ。

(17) 木村正身はわが国のラスキン評価史の一節で河上にふれてつぎのようにのべている。「積極的または消極的にマルクス主義に対抗するものとしてのかれ〔ラスキン〕の社会改良の実践を説くことは大正年間にはじまり……ここから御木本隆三氏のラスキン研究も出てくるが……他方御木本氏の師河上肇博士が初期のみずからのおなじ次元でのラスキン解釈を克服して、『改訂社会問題管見』大9)、ようやくカーライルⅡラスキンの「人道主義的経済学」の限界を一面ではたたく、しかし一面では重要な論点を封じたままで規定されようとした(『資本主義経済学史的発展』大12、『経済学大綱』昭3)ラスキン、木村訳『ムネラ・プルウエリス』(関書院、一九五八年)の解説、二九九―三〇〇ページ。ここに「重要な論点」といわれているものについては同三三二―三三三ページを参照。

三

『発展』に対する榎田の批判を契機にしてマルクス主義思想の一そうつつこんだ研究に入っていた河上は、経済原論の構成においてもその後急速に内容をかえていったが、そのことは『発展』刊行当時の大正二年度の講義——第一編生産・第二編交換・第三編分配という構成⁽¹⁾と、「すっかり『資本論』の解説そのものにしてしまった……昭和二年九月から翌三年三月にかけての講義」とをくらべて見ればわかるであろう。ところが河上はその昭和二年度のつまり河上の京大での最後の原論講義を改造社版『経済学全集』第一巻に『経済学大綱』の上編「資本家的社会の解剖」として収録するに際し、『発展』をその下編「資本家的経済学的发展」と題して再び世に問うことにした。その場合彼は三節より成る序説をあらたに書き下して冒頭につけ、昭和三年当時における彼の経済学史に対する見方をのべるとともに、本文の中にも「多少の加筆をなし」て、大正二二年以後の彼の研究成果をもちこむとともに、「マルクス学の見地からすれば甚しき欠陥を有する」『発展』を「可能なかぎりにおいて之を現在の立場に引寄せんと試みた」⁽³⁾。だがこうした加筆や修正は、河上の其後の思想的進展をしめす

記録としてはまことに有意義であるとはいへ、彼みずからも認めているように、「それはそれで一の統一体を形成していた旧書の面目を傷けた」という側面もあるのだから、『自叙伝』で告白しているように、「何人の著作をも真似たものではなく……明かに河上肇の作つた経済学史の著作たる独特の面白を具へて」いる著作として彼がその後も「特殊の愛着を残している」のは、むしろ『発展』の原型に對してであつたといつてよいであらう。そして河上独自の个性的産物たるこの『発展』が最近いろいろな視角からあたらしく見なおされつつあることは、十分注目にあたひするといわなければなるまい。

たとえば内田義彦は『発展』の意義をとくにそのスミス研究に力点をおいてつぎのように評価している。

「『スミスをして現代に生かしむれば、社会主義者』になつていたであらう」（『近世経済思想史論』という趣旨の考えをうけついで）『資本主義経済学の史的発展』は、取り上げた人物からいつても、オーソドックスな経済学史からみれば、まことに奇異であり、また、河上の到達点はまだマルクス主義的でないことを示している。しかし、マルクス主義の側からの本書に對する批判は、河上の問題意識を十分にくみとつたものではなかつた。論争は平行線におわつていたのである。とくに河上の発想は、学説史研究を『剰余価値学説史』の肉づけだとする『社会青年型』のそれとは対蹠的であつて、むしろある意味で、大河内一男、高島善哉等に始まる『市民社会』青年のスミス研究の発想を予見するものがあるのは興味深いのだが、ここでは述べる余裕がない」。

また石垣博美は『発展』のメリットをそのベンサム論にもとめてつぎのようにならべている。

「もしも河上の『史的発展』が、日本における西洋経済学史の『古典』にふさわしい内容もちらうとしたら、それは、つぎのような理由によるのであらう。第一に、イギリス近代史を貫流する自由主義の伝統を論じ、これ

を反映する経済学説の系列の一環にベンサムを組み入れたことは『著者一流の着眼』であった。ベンサムを省略した経済思想の歴史は、経済学の発生がこの国を中心としている以上、現代につながるもつとも重要な経済思潮の一方を見逃す不首尾に陥り、ひどく味気ない一面的な観念史の叙述におわることになるだろう。第二には、イギリスにおける古典経済学の背後に流れる社会哲学の、おそらくもつとも徹底した一面を、あますところなく指摘しているからである。河上のいう『生存権否認の思想』の含蓄が、西洋の伝統的文化圏の外側から古典思想を分析するとき、いやおうなしに指摘されうる際立った特色であることは、ユダヤ人であるマルクスの分析でさえ容易に到達しえない結論だといつてよい⁽⁷⁾。

さらに河上の古典学派経済学の研究の中で「最も弱き環を形成していた⁽⁸⁾」といわれるリカードウ研究についても『発展』を再評価しようとする吉沢芳樹の見解があらわれた⁽⁹⁾。吉沢はまずさきに紹介した内田義彦が「ロック、マンデヴィル、ヒュームにはじまってカーライルとラスキンに終る本書の特異な構成を、むしろ河上のライフ・テーマともいふべき『エゴイズム問題』の学史的探究のあらわれとしてとらえ、その独自の積極的意味を掘り起すに至った」ことを指摘した後に、『発展』の第三章「マルサス及びリカード」、第四章「ベンタム及びジェイムズ・ミル」に注目し、「かれはこれら両章で、ベンタムの功利主義思想体系（最大多数の最大幸福⁽¹⁰⁾）の一環としてリカードウの『原理』を、またジェイムズ・ミルの代議政体論を検討しているのである。ここにわれわれは、河上の超テーマたる『エゴイズム問題』との関連と同時に、大正デモクラシーの『時代の精神』の躍動を感じとることができる⁽¹⁰⁾」とのべ、河上の業績がわが国のリカードウ研究史のうえに占める意義をつぎのように論じている。

「だが、大正デモクラシー期に試みられた河上肇のこうした思想史的視角からするベントムⅡミルⅡリカード体系の研究が、先の価値Ⅱ剰余価値学説史の観点からするリカードウ研究〔吉沢は山田（盛）、森、久留間、堀の諸労作をあげていた〕と全く交錯することなしに終ったこと、そしてリカードウ研究の主流が思想史的視野を欠いた狹義の経済理論史研究に——それも蓄積論的視角の乏しい価値論Ⅱ分配論の研究に——陥ったことが、リカードウ研究から社会科学としての、水々しさとふくらみを失わせた最大の理由ではなからうか。……ベントムⅡリカードウ体系の積極像を再構成したうえで、マルクスのリカードウ批判の論理の意味と追求、こうした研究方向こそは、日本におけるリカードウ研究の原点ともいふべき河上肇の思想史的アプローチと、価値Ⅱ剰余価値学説の観点からする経済理論史的アプローチとを、新たな次元で統一することにならう。そしてこの困難な仕事に成功したとき、リカードウ研究は社会科学としての、魅力と力強さとをそなえることになると思われる」。

みられるようにとりあげ方は論者各様ではあるが、スミスからマルクスへという『発展』の基本線は認めたい。しかも単なる『剰余価値学説史』を下敷きにした学史ではないところに『発展』の積極的な独自性を見出して再評価しようとする意図においては共通している。河上のライバルであった福田徳三は大正一四年に内外の経済学史の研究書の解題をしているなかで、わが国のものには自家の研究をのべたものが殆んどなく「唯高橋誠一郎氏に『経済学史研究』あり、河上肇博士に『資本主義経済学の史的発展』ありて此の欠を補うのみ」⁽¹¹⁾とのべたが、重商主義経済思想を中心とする高橋のこの論文集（一九二〇年）と河上の古典派研究を土台とする『発展』とがわが国での最初の本格的な学史の専門書であり、この分野でアカデミズムが確立したことをしめす記念碑的作品であることは、ほぼ異論のないところであらう。また河上や福田より一世代後の学者で、若き日に『貧乏物

語』を読んで経済学研究の志を立てた向坂逸郎は、『発展』についても、「正確な経済学史としては」舞出長五郎の『経済学史概要』（一九三七年）におよばぬ『発展』が『概要』にはない「人をぐんぐん引っぱってゆく所」があることを指摘し、河上の全人的な熱情が読者の心をとらえるところに『発展』の特色があるとのべたが、河上という個性が大正デモクラシー期という恰好の時代的背景を得て十分に発揮されたこの作品が社会科学分野における近代日本自体の青春のかたみとして長く人々の愛読に堪えうるということもまた、大方の同意をえることができるのではないであろうか。さらにその向坂よりもう一時代後の経済学者たちが、この『発展』から経済学史の一層の展開のための示唆と養分をくみとろうとしているのである。私自身もまた、『発展』の基本線としての「スミスからマルクスへ」が、単に『国富論』から『資本論』へではなく、『道徳情操論』を背後にもつた『国富論』と『経済学批判序説』——それはほかならぬ『経済学批判要綱』『原資本論』の序説であった——を土台とする『資本論』とが河上の視野にとらえられたうえでの「スミスからマルクスへ」であったところ(13)に本書の生命力が根ざしており、その意味で本書はやはりわが国の経済学史研究にとつての古典であるといつてよいと考える。

- (1) 河上博士講述『経済原論』（大正一・二年度経済学研究会）を参照。それが大正一・四年度の講義プリントになると、第一編「資本ノ生産過程」、第二編「資本ノ流通過程」、第三編「資本ノ総過程」と『資本論』体系に準拠したものにかわっている。
- (2) 『自叙伝』、著作集第六卷、二三三ページ。
- (3) 『経済学大綱』序、六六ページ。
- (4) 同上、七二ページ。
- (5) 『自叙伝』、著作集第六卷、四四四ページ。大内兵衛は河上が『発展』に加筆して『大綱』の下編に収録する理由として述べている点について「その著者のいい分には多少のコジツケもあると思える」と書いている（『現代日本思想大系』19『河上肇』

の編者解説、筑摩書房、一九六四年、三三ページ）が、こうした無理をしてまで『発展』を改めて世に問うことにしたところに、河上の本書に対するなみなみならぬ愛着の強さがうかがわれる。

- (6) 内田「知識青年の諸類型」、『近代日本思想史講座』4「知識人の生成と役割」、一九五九年、内田『日本資本主義の思想像』（岩波書店、一九六七年）に収録、同書一三四ページ。

- (7) 石垣「河上肇とベンサム」、鈴木鴻一郎編『マルクス経済学の研究』上、東大出版会、一九六八年所収、三八四ページ。

- (8) 真実一男「明治および大正前期におけるリカードゥ導入史」、大阪市大『経済学年報』16、一九六二年、一六六ページ。

- (9) 吉沢芳樹「社会科学としてのリカードゥ研究の復位」、『リカーディアーナ』（リカードゥ全集）季報』4、一九七〇年八月、一―五ページ。なお吉沢「発展的社会把握におけるリカードゥとマルクス」（『経済学全集』3『経済学史』別冊、筑摩書房、一九七〇年）の中にもほぼ同様の指摘がある。同書一―二ページ参照。

- (10) 吉沢はここで『発展』と同時代のベンサム研究の例として、小泉信三「正統派経済学と功利主義哲学」（大正一一年）や平野義太郎が大正末期に発表したベンサム法理論研究の三論文のことをあげているが、河上門下のリカードゥ研究家堀経夫にも当時つぎのようなベンサム研究があったこともあわせて考えるべきであろう。堀「功利主義と生産政策」、『経済論叢』第一四卷第五・六号、第一五卷第一号。一九二二年。堀『経済と自由』、弘文堂書房、一九二三年に所収。

- (11) 福田徳三『経済学全集』第一卷、同文館、一九二五年、一四四ページ。

- (12) 『書評』第九号、一九四七年一月、一九ページ。

- (13) 福田門下の大熊信行は、経済学者としての河上にかなりきびしい評価をくだしてはいるが、わが国の経済学史のなかで「古典として残るべきものがあるとすれば、第一に指をこの異色編に屈しなければなるまい」としている。大熊「河上肇」、朝日ジャーナル編『日本の思想家』3、朝日新聞社、一九六三年、一四〇ページ。

（一九七一・一・一五）